

三尺角

泉鏡花作

—

「
山には木樵唄、水には舟歌、驛路には馬子の唄、渠
等はこれを以て心を慰め、勞を休め、我が身を忘れ
て屈託なく其業に服するので、恰も時計が動く毎に
セコンドが鳴るやうなものであらう。また其がため
に勢を増し、力を得ることは、戦に鯨波を擧げるに
齊しい、曳々！ と一齊に聲を合はせるトタンに、
故郷も、妻子も、死も、時間も、慾も、未練も忘れ
るのである。」

同じ道理で、 坂は照る／＼鈴鹿は曇る 〓 と
いひ、 〓 袷遣りたや足袋添へて 〓 と唱へる場合
には、いづれも疲を休めるのである、無益なもの
おもひを消すのである、寧ろ苦勞を紛らさうとする
のである、憂を散じよう、戀を忘れよう、泣音を忍
ばうとするのである。

それだから追分が何時でもあはれに感じらるゝ。
つまる處、卑怯な、臆病な老人が念佛を唱へると
大差はないので、語を換へて言へば、不殘、節をつ
けた不平の獨言である。

船頭、馬方、木樵、機業場の女工など、あるが中
に、此の木挽は唄を謠はなかつた。其の木挽の與吉
は、朝から晩まで、同じことをして木を挽いて居る。
黙つて大鋸を以て巨材の許に跪いて、そして仰いで
禮拜する如く、上から挽きおろし、挽きおろす。此
度のは、一昨日の朝から懸つた仕事で、ハヤ其半を
挽いた。丈四間半、小口三尺まはり四角な樟を眞二
つに割らうとするので、與吉は十七の小腕だけれど
も、此業には長けて居た。

目鼻立の愛くるしい、罪の無い丸顔、五分刈に
向、三尺帯を前で結んで、南の字を大きく染抜いた半
被を着て居る、これは此處の大家の仕着で、挽いて
る樟も其の持分。

未だ暑いから股引は穿かず、跣足で木屑の中につ
いた膝、股、胸のあたりは色が白い。大柄だけれど

も肥つては居らぬ、ならば袴でも穿かして見たい。
與吉が身體を入れようといふ家は、直間近で、一町
ばかり行くと、袂に一本暴風雨で根返して横様にな
つたまゝ、半ば枯れて、半ば青々とした、あはれな
銀杏の矮樹がある、橋が一個。其の濫色の橋を渡る
と、岸から板を渡した船がある、板を渡つて、苦の
中へ出入をするので、此船が與吉の住居。で干潮の
時は見るも哀で、宛然洪水のあとの如く、何時棄て
た世帶道具やら、缺摺鉢が黒く沈むで、蓬のやうな
水草は波の随意靡いて居る。この水草はまた年久し
く、船の底、舷に搦み着いて、恰も巖に苔蒸したか
のやう、與吉の家をしつかりと結へて放しさうにも
しないが、大川から汐がさして来れば、岸に茂つた
柳の枝が水に潜り、泥だらけな笹の葉がびた／＼と
洗はれて、底が見えなくなり、水草の隠れるに従う
て、船が浮上ると、堤防の遠方にすく／＼と立つて
白い煙を吐く此處彼處の富家の煙突が低くなつて、
水底の其の缺摺鉢、塵芥、襪褌切、釘の折などは不
殘形を消して、蒼い潮を満々と湛へた溜池の小波の
上なる家は、掃除をするでもなしに美しい。

爾時は船から陸へ渡した板が眞直になる。これを

渡つて、今朝は殆ど満潮だったから、與吉は柳の中
へ二と旭がさす、黄金のやうな光線に、其罪のない
顔を照らされて仕事に出た。

其それから日ひ一日いちにちおなじことをして働はたらいて、黄昏たそがれかゝると日ひが春つばきき、柳やなぎの葉はが力ちからなく低たれて水みづが暗くらうなると汐しほが退ひく、船ふねが沈しづむで、板いたが斜なめになるのを渡わたつて家いえに歸かへるので。

留守るすには、年としよ寄よつた腰こしの立たたない與よきち吉ちの爺ぢやん々んが一人ひとで寝ねて居ゐるが、老らうこ後ごの病やまひで次第しだいに弱よわるのであるから、急きふに客きやく體たいの變かはるといふ憂きつ慮かひはないけれども、與よきち吉ちは雇やとはれ先さきで晝ひる飯めしをまかなはれては、小休こやすみの間あひだに毎日まいにち一度どづつ、見舞みまひに歸かへるのが例れいであつた。

「ぢやあ行いつて來くるぜ、父ちやん爺ん。」

與よへい平へいといふ親おやぢ仁には、涅ね槃はんに入いつたやうな形かたちで、胸むねの間まに寝ねながら、佛ほとけ造つくつた額ひたひを上げ、汗あせだらけだけれども目めの涼すずしい、息せがれ子こが地ぢ藏ざう眉まゆの、愛あいくるしい、少わかい顔かほを見て、嬉うれしさうに頷うなづいて、

「晩ばんにや又また柳やなぎ屋やの豆とうふ腐ふにしてくんねえよ。」

「あい、」といつて苦くを潜くつて這はふやうにして船ふねから出でた。與よきち吉ちはづつと立たつて板いたを渡わたつた。向むかうて筋違すぢかい、角かどから二軒目けんめに小ちひさな柳やなぎの樹きが一本ほん、其その低ひく

い枝のしなやかに垂れた葉隠れに、一間口二枚の腰障子があつて、一枚には假名、一枚には眞名で豆腐と書いてある。柳の葉の翠を透かして、障子の紙は新らしく白いが、秋が近いから、破れて煤けたのを粘替へたので、新規に出来た店ではない。柳屋は土地で老舗だけれども、手廣く商をするのではなく、八九十軒もあらう百軒足らずの此の部落だけを花主にして、今代は喜藏といふ若い亭主が、自分で賣りに廻るばかりであるから、商に出た留守の、晝過は森として、柳の蔭に腰障子が閉まつて居る、樹の下、店の前から入口へ懸けて、地の窪むだ、泥濘を埋めるため、一面に貝殻が敷いてある、白いの、半分黒いの、薄紅、赤いのも交つて堆い。

隣屋は此邊に棟を並ぶる木屋の大家で、軒、廂、屋根の上まで、葺と木材を積揃へた、眞中を分けて、空高い長方形の透間から凡そ三十疊も敷けようといふ店の片廂が見える、其の木材の蔭になつて、日の光もあからさまには射さず、薄暗い、冷々とした店前に、帳場格子を控へて、年配の番頭が唯一人帳合をしてゐる。これが角屋敷で、折曲ると灰色をした

道が一筋、電柱の著しく傾いたのが、前と後へ、別々に頭を掉つて奥深く立つて居る、鋼線が又半だるみをして、廂よりも低い處を、弱々と、斜めに、さも／＼衰へた形で、永代の方から長く續いて居るが、圖に描いて線を引くと、文明の程度が段々此方へ來るに従つて、屋根越に鈍ることが分るであらう。

單に電柱ばかりでない、鋼線ばかりでなく、橋の袂の銀杏の樹も、岸の柳も、豆腐屋の軒も、角家の塀も、それ等に限らず、あたりに見ゆるものは、門の柱も、石垣も、皆傾いて居る、傾いて居る、傾いて居る、が盡く一様な向にはなく、或ものは南方へ、或ものは北の方へ、また西の方へ、東の方へ、てん／＼ばら／＼になつて、此風のない、天の晴れた、曇のない、水面のそよ／＼とした、静かな、穏かな日中に處して、猶且つ暴風に揉まれ、揺らるゝ、其瞬間の趣あり。ものゝ色もすべて褪せて、其灰色に鼠をさした濕地も、草も、樹も、一部落を蔽包むだ夥多しい材木も、材木の中を見え透く溜池の水の色も、一切、喪服を着けたやうで、果敢なく哀である。

界限の景色がそんなに沈鬱で、濕々として居るに
 従つて、住む者もまた高聲ではものをいはない。歩
 行にも内端で、俯向き勝で、豆腐屋も、八百屋も黙
 つて通る。風俗も派手でない、女の好も濃厚ではな
 い、髪飾も赤いものは少なく、皆心するともなく、
 風土の喪に服して居るのであらう。

元來岸の柳の根は、家々の根太よりも高いので
 あるから、破風の上で、切々に、蛙が鳴くのも、欄
 干の壊れた、板のはなれ／＼な、杭の抜けた三角形
 の橋の上に蘆が茂つて、蟲がすだくのも、船蟲が群
 がつて往來を駈けまはるのも、工場の煙突の烟が遙
 かに見えるのも、洲崎へ通ふ車の音がかたまつて響
 くのも、二日おき三日置きに思出したやうに巡査が
 入るのも、けたましく郵便配達の走込むのも、烏
 が鳴くのも、皆何となく土地の末路を示す、滅亡の
 兆であるらしい。

けれども、滅びるといつて、敢て此の部落が無く
 なるといふ意味ではない。衰へるといふ意味ではな

い。人と家とは榮えるので、進歩するので、繁昌する
るので、やがて其電柱は眞直になり、鋼線は張を持
ち、橋がペンキ塗になつて、黒塀が煉瓦に換ると、
蛙、船蟲、そんなものは、不殘石灰で殺されよう。
即ち人と家とは、榮えるので、憊る景色の倂がなく
ならうとする、其の末路を示して、滅亡の兆を表は
すので、詮ずるに、蛇は進んで衣を脱ぎ、蝉は榮え
て殻を棄てる、人と家とが、皆他の光榮あり、便利
あり、利益ある方面に向つて脱出した跡には、此地
のかゝる倂が、空蝉になり脱殻になつて了ふのであ
る。

敢て未来のことはいはず、現在既に其の姿になつ
て居るのではないか。脱け出した或者は、鳴き、且
つ飛び、或者は、走り、且つ食ふ、けれども衣を脱
いで出た蛇は、殘した殻より、必ずしも美しいもの
とはいはれない。

あゝ、まぼろしのなつかしい、空蝉のかやうな風
土は、却つてうつくしいものを産するのか、柳屋に
艶麗な姿が見える。

與吉は父親に命ぜられて、心に留めて出たから、

岸きしに上あると、思おもふともなしに豆腐屋とうふやに目めを注そいだ。

柳屋やなぎやは浅間あさまな住居すまひ、上框あがりかまちを背後うしろにして、見通みとおしの四疊半でふはんの片端かたはしに、隣家となりで帳合ちやうあひをする番頭ばんとうと同一おなじあたりの、柱はしらに凭もたれ、袖そでをば胸むねのあたりで引ひき合あはせて、浴衣ゆかたの袂たもとを折返をりかへして、寐床ねどこの上うへに坐すわつた膝ひざに搔卷かいまきを懸かけて居ある。背せなには綿わたの厚あつい、ふつくりした、豎縞たてしまのちやん／＼を着きた、鬱金木綿うこんもめんの裏うらが見みえて襟脚えりあしが雪ゆきのやう、艶氣つやけのない、赤熊しゃくまのやうな、ばさ／＼した、餘あまるほどあるのを天神てんじんに結ゆつて、浅黄あさぎの角絞つのしぼりの手絡てがらを弛ゆるう大おほきくかけたが、病氣びやうきであらう、弱々よわ／＼とした後姿つしらすがた。

見透みとおしの裏うらに小庭こにはもなく、すぐ隣屋となりの物置ものおきで、此處こゝにも犇々ひし／＼と材木ざいもくが建重たてかさねてあるから、薄暗うすくらい中に、鮮麗あさやかな其浅黄そのあさぎの手絡てがらと片頬かたほの白しろいのが、拭込ふきこむだ柱はしらに映うつつて、ト見みると露草つゆぐさが咲さいたやうで、果敢はかなくも綺麗きれいである。

與吉よきちはよくも見みず、通とほりがかゝりに、「今日こんにちは、ト、聲こゑを掛かけたが、フト引戻ひきもとさるゝやうにして覗のぞいて見みた、心付こころづくと、自分じぶんが挨拶あいさつしたつもりつもりの婦人をんなはこの人ひとではない。

四

「居ない。」と呟くが如くにいつて、其まゝ通
抜けようとする。

ト日があたつて暖たかさうな、明い腰障子の内に、
前刻から静かに水を搔廻す氣勢がして居たが、ばつ
たりといつて、下駄の音。

「與吉さん、仕事にかい。」

と婀娜たる聲、障子を開けて顔を出した、水色の
唐縮緬を引裂いたまゝの襷、玉のやうな腕もあらは
に、蜘蛛の圍を絞つた浴衣、帯は占めず、細紐の態
で裾を端折つて、布の純白なのを、短かく脛に掛け
て甲斐々々しい。

齒を染めた、面長の、目鼻立はつきりとした、眉
は落さぬ、束ね髪の中年増、喜藏の女房で、お品と
いふ。

濡れた手を間近な柳の幹にかけて半身を出した、
お品は與吉を見て微笑むだ。

土間は一面の日あたりで、盤臺、桶、布巾など、
ありつたけのもの皆濡れたのに、薄く陽炎のやうな

のが立籠めて、豆腐がどんよりとして沈んだ、新木の大桶の水の色は、薄ら蒼く、柳の影が映つて居る。

「晩方又來るんだ。」

お品は莞爾しながら、「難有う存じます、」

故と慇懃にいつた。

つか／＼と行懸けた與吉は、これを聞くと、あまり自分の素氣なかつたのに氣がついたか、小戻りして眞顔で、眼を一ツ瞬いて、

「えゝ、毎度難有う存じます。」と、罪のない口の利きやうである。

「ほゝゝ、何をいつてるのさ。」

「何がよ。」

「だつてお前様はお客様ぢやあないかね、お客様なら私ん處の旦那だね、ですから、あの、毎度難有う存じます。」

と柳に手を縋つて半身を伸出たまゝ、胸と顔を斜めにして、與吉の顔を差覗く。

與吉は極の惡さうな趣で、

「お客様だつて、あの、私は木挽の小僧だもの。」
と手真似で見せた、與吉は兩手を突出してぐつと引いた。

「かうやつて、かう挽いてるんだぜ、木挽の小僧だぜ。お前様はおかみさんだらう、桝屋のおかみさんぢやねえか、それ見ねえ、此方でお辭儀をしなければならぬんだ。ねえ、」

「あれだ、」とお品は目を睜つて、
「まあ、勿體ないわねえ、私達に何のお前さん

といひかけて、つく／＼瞻りながら、お品はづつと立つて、與吉に向ひ合ひ、其の襷懸けの綺麗な腕を、兩方大袈裟に振つて見せた。

「かうやつて威張つてお出よ。」

「威張らなくツたつて、何も、威張らなくツたつて構はないから、父爺が魚を食つてくれると可いけれど、」

と何と思つたか與吉はうつむいて悄れたのである。

「何うしたんだね、又餘計に悪くなつたの。」
と深切にも優しく眉を顰めて聞いた。

「餘計に悪くなつて堪るもんか、此節あ心持が快
方だつていふけれど、え、魚氣を食はねえぢやあ、
身體が弱るつていふのに、父爺はね、腥いものによ
箸もつけねえで、豆腐でなくつちやあならねえツて
いふんだ。え、おかみさん、骨のある豆腐は出來ま
いか。」

と思出したやうに唐突にいつた。

「おや、」

お品は與吉がいふことの餘り突拍子なのを、笑ふよりも先づ驚いたのである。

「ねえ、親方に聞いて見てくんねえ、出来さうなもんだなあ。雁もどきツて、ほら、種々なものが入った油揚げがあらあ、銀杏だの、椎茸だの、あれだ、あの中へ、え、肴を入れて交ぜツこにするてえことあ不可ねえのかなあ。」

「そりや、お前さん。まあ、可いやね、聞いて見て置きませうよ。」

「あゝ、聞いて見てくんねえ、眞個に肴ツ氣が無くツちやあ、臺なし身體が弱るツていふんだもの。」

「何故父上は脛をお食りぢやあないのだね。」
 與吉の眞面目なのに釣込まれて、笑ふことの出来なかつたお品は、到頭骨のある豆腐の注文を笑はずに聞き濟ました、そして眞顔で尋ねた。

「えゝ、其何だつて、物をこそ言はねえけれど、目もあれば、口もある、それで生白い色をして、蒼いものもあるがね、煮られて皿の中に横になつた姿

てえものは、魚々と一口にやあいふけれど、考へて見りやあ生身をぐつ／＼煮着けたのだ。尾頭のあるものゝ死骸だと思ふと、氣味が悪くツて食べられねえツて、左様いふんだ。

詰らねえことを父爺いふもんぢやあねえ、山の中の爺婆でも鹽したのを食べるツてよ。

煮たのが、心持が悪けりや、刺身にして食べないかつていふとね、身震をするんだぜ。刺身ツていやあ一寸試だ、鱈にすりやぶつ／＼切か、あの又目のついた天窓へ骨が繋つて肉が絡ひついて残る圖なんてものは、と厭な顔をするからね。あゝ、といつて與吉は頷いた。これは力を入れて對手に其意を得させようとしたのである。

「左様なんかねえ、年紀の故もあらう、一ツは氣分だね、お前さん、そんなに厭がるものを無理に食べさせない方が可いよ、心持を悪くすりや身體のたしにもなんにもならないわねえ。」

「でも痩せるやうだから心配だもの。氣が付かないやうにして食べさせりや、胸を悪くすることもなからうからなあ、いまの豆腐の何よ。ソレ、」

「骨のあるがんもどきかい、ほゝゝほゝ、」
と笑つた、垢抜けのした顔に鐵漿を含んで美しい。
片頬に觸れた柳の葉先を、お品は其艶やかに黒い
前歯で銜へて、扱くやうにして引斷つた。青い葉を、
カチノゝと二ツばかり噛むで手に取つて、掌に載せ
て見た。トタンに框の取附の柱に凭れた淺黄の手絡
が此方を見向く、うら少のと面を合はせた。

其時までは、殆ど自分で何をするかに心付いて居
ないやう、無意識の間にして居たらしいが、フト目
を留めて、俯向いて、ぞつと見て、又梢を仰いで、
「與吉さんのいふやうぢやあ、まあ、嗚此の葉も
痛むこツたらうねえ。」

と微笑んで見せて、少いのが其清い目に留めると、
くるりと廻つて、空ざまに手を上げた、お品はすつ
と立つて、しなやかに柳の幹を叩いたので、蜘蛛の
巣の亂れた薄い色の浴衣の袂は、ひらひらと動いた。

與吉は半被の袖を搔合はせて、立つて見て居たが、
急に振返つて、

「さうだ。ぢやあ親方に聞いて見ておくんない。可

「いかい、」

「あゝ、可いいとも、」
といつて向直むきなほつて、お品しな
は搔潜かいくつて襷たすきを脱はづした。斜なめに袈裟げさになつて結目むすびめが
すらりと下さがる。

「お邪魔じやまを申まをしました。」

「あれだよ。又また、」

と、莞爾にっこりしていふ。

「さうだつけな、うむ、此方こつちあ客きやくだぜ。」

與吉よきちは獨ひとりで額うなづいたが、背何うしろむきになつて、肱ひぢを張はつて、
南なんの字じの印しるしが動うごく、半被はつびの袖そでをぐツと引ひいて、手てを
掉ふつて、

「おかみさん、大威張おほあはりだ。」

「あばよ。」

六

「あい、」といひすてに、急足で、與吉は見る
内に間近な澁色の橋の上を、黒い半被で渡つた。眞
中頃で、向岸から駈けて來た郵便配達と行合つて、
遣違ひに一緒になつたが、分れて橋の兩端へ、配達
はつか／＼と間近に來て、與吉は彼の、倒れながら
に半ば黄ぼんだ銀杏の影に小さくなつた。

「郵便！」

「はい、」と柳の下で、洗髪のお品は、手足の

眞黒な配達夫が、突當るやうに目の前に踏留まつて
棒立になつて喚いたのに、驚いた顔をした。

「更科お柳さん、」

「手前でもでございます。」

お品は受取つて、青い状袋の上書をじつと見なが
ら、片手を垂れて前垂のさきを抓むで上げつつ、素
足に穿いた黒緒の下駄を揃へて立つたが、一寸翻
して、裏の名を讀むと、顔の色が動いて、横目に框
をすかして、片頬に笑を含むで、堪らないといつた
やうな聲で、

「柳ちゃん、来たよ！」といふが疾いか、横ざ
まに駆けて入る、柳腰、下駄が脱げて、足の裏が美
しい。

與吉が仕事場の小屋に入ると、例の如く、直ぐ其
まゝ材木の前に跪いて、鋸の柄に手を懸けた時、配
達夫は、此處の前を横切つて、身を斜に、波に揺ら
れて流るゝやうな足取で、走り去つた。

與吉は見も遣らず、傍目も觸らないで挽きはじめ
る。

巨大なる此の樟を濡らさないために、板屋根を葺
いた、小屋の高さは十丈もあらう、脚の着いた臺に
寄せかけたのが突立つて、殆ど屋根裏に届くばかり。
この根際に膝をついて、伸上つては挽き下ろし、伸
上つては挽き下ろす、大鋸の齒は上下にあらはれて、
両手をかけた與吉の姿は、鋸よりも小さいかのやう。
小屋の中には單こればかりでなく、兩傍に堆く偉
大な材木を積んであるが、其の嵩は與吉の丈より高
いので、纔に鋸屑の降積つた上に、小さな身體一ツ
入れるより他に餘地はない。で恰も材木の穴の底に
跪いてるに過ぎないのである。

背後は突抜けの岸で、こゝにも地と一面な水が蒼

く澄むで、ひた／＼と小波の畝が絶えず間近う来る。往來傍には又岸に臨むで、果しなく組違へた材木が並べてあるが、二十三十づゝ、四ツ目形に、井筒形に、規律正しく、一定した距離を置いて、何處までも續いて居る、四ツ目の間を、井筒の彼方を、見え隠れに、ちらほら人が通るが、皆黙つて歩行いて居るので。

淋い、森とした中に手拍子が揃つて、コツ／＼コツくと、鐵槌の音のするのは、この小屋に並んだ、一棟、同一材木納屋の中で、三個の石屋が、石を鑿るのである。

板圍をして、横に長い、屋根の低い、濕つた暗い中で、働いて居るので、三人の石屋も齊しく南屋に雇はれて居るのだけれども、渠等は與吉のやうなのではない、大工と一緒に、南屋の普請に懸つて居るので、ちやうど與吉の小屋と往來を隔てた眞向うに、小さな普請小屋が、眞新しい。節穴だらけな、薄板で建つて居る、三三が圍つたばかり、編むで繫いだ縄も見え、一杯の日當で、いきなり土の上へ白木の卓子を一脚据ゑた、其上には大土瓶が一個、茶香茶碗

が七個八個。

後に置いた腰掛臺の上に、一人は匍匐になつて、
肱を張て長々と伸び、一人は横ざまに手枕して股引
穿いた脚を屈めて、天窗をくツつけ合つて大工が寝
そべつて居る。普請小屋と、花崗石の門柱を並べて
扉が左右に開いて居る、門の内の横手の格子の前に、
萌黄に塗つた中に南と白で抜いたポンプが据つて、
其縁に釣棹と籃とがぶらりと懸つて居る。眞にもの
静かな、大家の店前に人の氣勢もない。裏庭もふあ
たり、遙か奥の方には、葉のやゝ枯れかゝつた葡萄
棚が、影を倒にうつして、此處もおなじ溜池で、門
のあたりから間近な橋へかけて、透間もなく亂杭を
打つて、數限もない材木を水のまゝに浸してあるが、
彼處へ五本、此處へ六本、流寄つた形が判で印した
如く、皆三方から三ツに固つて、水を三角形に區切
つた、あたりは廣く、一面に早苗田のやうである。
この上を、時々ばら／＼と雀が低う。

其他に此處で動いてるものは與吉が鋸に過ぎなかつた。

餘り静かだから、しばらくして、又しばらくして、樟を挽く毎にぼろ／＼と落つる木屑が判然聞える。

(父親は何故魚を食べないのだらう、)とおもひながら膝をついて、伸上つて、鋸を手元に引いた。木屑は極めて細かく、極めて軽く、材木の一處から湧くやうになつて、肩にも胸にも膝の上にも降りかゝる。トタンに向うざまに突出して腰を浮かした、鋸の音につれて、又時雨のやうな微な響が、寂寞とした巨材の一方から聞えた。

柄を握つて、挽きおろして、與吉は呼吸をついた。

(左様だ、魚の死骸だ、そして骨が頭に繋がつたまゝ、皿の中に残るのだ、)

と思ひながら、絶えず拍子にかゝつて、伸縮に身體の調子を取つて、手を働かす、鋸が上下して、木屑がまた溢れて來る。

(何故だらう、これは鋸で挽く所爲だ、)と考

へて、柳の葉が痛むといったお品の言が胸に浮ぶと、
又木屑が胸にかゝつた。

與吉は薄暗い中に居る、材木と、材木を積上げた
周囲は、杉の香、松の匂に包まれた穴の底で、目を
瞠つて、跪いて、鋸を握つて、空ざまに仰いで見た。
樟の材木は斜めに立つて、屋根裏を漏れてちら／
＼する日光に映つて、言ふべからざる森嚴な趣があ
る。この見上ぐるばかりな、これほどの丈のある樹
はこの邊でつひぞ見た事はない、橋の袂の銀杏は固
より、岸の柳は皆短い、土手の松はいふまでもない、
遙に見える其梢は殆ど水面と並んで居る。

然も猶これは眞直に眞四角に切たもので、およそ
忤る材木を得ようといふには、杣が八人五日あまり
も懸らねばならぬと聞く。

那な大木のあるのは蓋し深山であらう、幽谷でな
ければならぬ。殊にこれは飛驒山から廻して來たの
であることを聞いて居た。

枝は蔓つて、谷に互り、葉は茂つて峰を蔽ひ、根
はたゞ一山を絡つて居たらう。

其時は、其下蔭は矢張こんな暗かつたが、蒼空に日の照る時も、と然う思つて、根際に居た黒い半被を被た、可愛い顔の、小さな蟻のやうなものが、偉大なる材木を仰いだ時は、手足を縮めてぞつとしたが、

(父親は何うしてるだらう、)
と考へついた。

鋸は又動いて、

(左様だ、今頃は彌六親仁がいつもの通、筏を流して来て、あの、船の傍を漕いで通りすぎりに、父上に聲をかけてくれる時分だ、)

と思はず振向いて池の方、うしろの水を見返つた。溜池の真中あたりを、頬冠した、色のあせた半被を着た、脊の低い親仁が、腰を曲げ、足を突張つて、長い棹を繰つて、晝の如く漕いで来る、筏は恰も人を乗せて、油の上を迂るやう。

する／＼と向うへ流れて、横ざまに近づいた、細い黒い毛脛を掠めて、蒼い水の上を鷗が弓形に大きく鮮かに飛んだ。

「與太坊、父爺は何事もねえよ。」

と、池の眞中から聲を懸けて、おやぢは小屋の中を覗かうともせず、爪さきは小波を浴ぶるばかり沈むだ筏を棹さして、此時また中空から白い翼を翻して、ひら／＼と落ちて来て、水に姿を宿したと思ふと、向うへ飛んで、鷗の去つた方へ、すら／＼と流して行く。

これは彌六といつて、與吉の父爺が年來の友達で、孝行な兒が仕事をしながら、病人を案じて居るのを知つて居るから、例として毎日今時分通りがかりに其消息を傳へるのである。與吉は安堵して又仕事にかゝつた。

（父親は何事も無いが、何故魚を喰べないのだから、魚の煮たのは、食べると肉がからみついたまゝ頭に繋つて、骨が残る、彼の皿の中の死骸に何うして箸がつけられようといつて身震をする、まつたくだ。そして魚ばかりではない、柳の葉も食切ると痛

むのだ、）　と思ひ／＼、又この偉大なる樟の殆ど
神聖に感じらるゝばかりな巨材を仰ぐ。

高い屋根は、森閑として日中薄暗い中に、ほの／＼
と見える材木から又ばら／＼と、ばら／＼と、其
處ともなく、鋸の屑が溢れて落ちるのを、思はず耳
を澄まして聞いた。中央の木目から渦いて出るのが、
池の小波のひた／＼と寄する音の中に、隣の納屋の
石を切る響に交つて、繁つた葉と葉が擦合ふやうで、
たとへば時雨の降るやうで、又無数の山蟻が谷の中
を歩行く跫音のやうである。

與吉はとみかうみて、肩のあたり、胸のあたり、
膝の上、跪いてる足の間、に落溜つた、堆い、木屑の
積つたのを、樟の血でないかと思つてゾツとした。

今まで其上について暖だつた膝頭が冷々とする、
身體が濡れはせぬかと疑つて、彼處此處袖襟を手で
拵いて見た。仕事最中、こんな心持のしたことは始
めてである。

與吉は、一人谷のドン底に居るやうで、心細くな

つたから、見透かす如く日の光を仰いだ。薄い光線が屋根板の合目から洩れて、幽かに樟に映つたが、巨大なるこの材木は唯單に三尺角のみのものではなかつた。

與吉は天日を蔽ふ、葉の茂つた五抱もあらうといふ幹に注連繩を張つた樟の大樹の根に、恰も山の端と思ふ處に、しつきりなく降りかゝる翠の葉の中に、落ちて落ち重なる葉の上に、あたりは眞暗な處に、蟲よりも小な身體で、この大木の恰も其の注連繩の下あたりには鋸を突さして居るのに心付いて、恍惚として目を睜つたが、氣が遠くなるやうだから、鋸を抜かうとすると、支へて、堅く食入つて、微かにも動かぬので、はつと思ふと、谷々、一峰々みね／＼、一陣轟！と渡る風の音に吃驚して、數千仞の谷底へ、眞倒に落ちたと思つて、小屋の中から轉がり出した。

「大變だ、大變だ。」

「あれ！ お聞き、」と涙聲で、枕も上らぬ寢床の上の露草の、がツくりとして仰向けの淋い素顔に紅を含んだ、白い頬に、蒼みのさした、うつくし

い、妹の、ばさ／＼した天神鬘の崩れたのに、淺黄の手絡が解けかゝつて、透通るやうに眞白で細い頸を、膝の上に抱いて、抱占めながら、頬摺していつた。お品が片手にはしつかりと前刻の手紙を握つて居る。

「ねえ、ねえ、お聞きよ、あれ、柳ちゃん　ー　柳ちゃん　ー　しつかりおし。お手紙にも、これらの材木に枝葉がさかえるやうなことがあつたら、夫婦に成つて遣るツて書いてあるぢやあないか。」

親の爲だつて、何だつて、一旦他の人に身をお任せだもの、道理だよ。お前、お前、それで氣を落したんだけれど、命をかけて願つたものを、お前、其までに思ふものを、柳ちゃん、何だつてお見捨てなされるものかね、解つたかい、あれ、あれをお聞きよ。もう可いよ。大丈夫だよ。願は叶つたよ。」

「大變だ、大變だ、材木が化けたんだぜ、小屋の材木に葉が茂つた、大變だ、枝が出来た。」
と普請小屋、材木納屋の前で叫び足らず、與吉は

狂氣きやうきの如ごとく大聲おほいで、此家このやの前まへをも呼よはつて歩あ行るいた
のである。

「ね、ね、柳りゅうちゃん　ー　柳りゅうちゃん　ー　」
うつとりと、目めを開あいて、ハヤ色いろの褪あせた唇くちびるに微ほ
笑あむで頷うないた。人ひとに血ちを吸すはれたあはれな者ものの、將まさ
に死しなんとする耳みみに、與吉よきちは福音ふくいんを傳つたへたのである、
この與吉よきちのやうなものでなければ、實際じっさいまた恚かる福ふく
音いんは傳つたへられなかつたのであらう。

【完】